

私たちの「X」

甘くて辛い  
悦びは痛みですか

Fukapon  
よにふいくみやはか



「私って、野暮ったいかな？」

空っぽになったお弁当箱を閉じて、ポカンと青空を眺めていた桜野風音に、ポツリと声が届いた。

「ん？ 何？ 急に」

「ごめんね、急に。ちょっと気になって」

後頭部のしっぽを揺らし移動した視線の先では、土田杏子つちだきよこが同じようにお弁当箱を閉じて、その膝上を見て座っていた。

「私はそう思わないけど。杏子、可愛いし」

「ありがと。風音はそう言うと思った」

「あー、なんか冷たい。別に、お世辞とかそーゆうんじゃないのに」

風音は今日の空のようにカラッと晴れた声でおどけると、すうと背中を倒し、バシヤンと音を立てる。

「またそんなことして。髪も背中も汚れちゃうよ？」

「洗えばいいんだから気にしない。けど、このフェンスが倒れたら落ちて死んじゃうからやめとこっか」

上体を戻して振り返ると、穏やかな街が一望できる。土曜日の昼下がり、二人だけの屋上。

「男女で『可愛い』の意味が違うって言うよね」

風音の視線が再び逸らされると、杏子は話を戻した。

「言うけど、あれって女側の言い訳じゃないの？」

突然に戻された話題にも、全く違和感なくついて行けるのが、この二人の間柄。

ケロリと毒舌を吐くのは、風音の人柄なのだろう。

「それはちょっとひどいと思うよ」

「そうかなあ。その手の『可愛い』って、そう言った方が得だっ

て計算してる場合だよ」

「さっきのは、計算した場合？」

「んなわけないでしょ。それで、誰に言われたのよ？」

変わらず遠くを眺めながら、今度は風音が話を戻した。だけでなく、話を進めたことに、杏子はどうしたものかとぼけた様子。

「えっ？ な、何が？」

素知らぬ顔してお弁当箱を鞆に戻そうとするも、あっさり核心を突く風音にその腕は止められた。

『野暮ったい』って言われたんでしょう？ 差し詰め、好きな奴に」

「……わかる？」

「わかるでしょ、普通。そーゆうところは野暮ったいのかもね」  
杏子の問い返しに、風音はポニーテールを泳がせながらあっさりと答える。

「そ、そりゃ、少し鈍いところはあると思うけど……」

俯いて頬を染める杏子。きつとそんな感じだと想像して振り向くと、やっぱり想像通りの姿がそこにはあった。

(こんなに可愛いのが、なんでわからないかなあ)

しまい損ねたお弁当箱を、ちょこっと鞆から出してみたり、ちょこっと鞆に入れてみたり。落ち着きのない小さな動きが、風音にはとてもいじらしく映った。

「どこのどいつが、なんて言ったの？ 教えてみなさい、お姉さんに」

「……私の方がお姉さんだもん」

「はいはい、私より一日だけお姉さんの杏子さん、教えてくださいいな」

迷いなく言えるような杏子ではないが、風音の方はとっと聞きたいらしい。ささやかな抵抗もむなしく、杏子は早速話す羽目になってしまった。

「昨日、忘れ物を取りに戻ったとき……」

「眼鏡忘れるなんて杏子らしいよね」

「それはこの際置いて。そのとき、たまたま聞いちゃったの」  
 そこまで言うと、杏子は小さく深呼吸。彼女にしてみれば勇気のいる話、まだ踏み切れないところもあるのだろう。

そんな心を見透かしてますよとにやにやする風音を、彼女は視界から外した。そして青空に向かってもう一度深呼吸をして、話を続ける。

「たまたま『うちのクラスの可愛い女子』的な話で」

「好きだよねー、あいつら。そーゆーことやってっから来週チョコもらえないんだよ」

「まさにその話だったんだけど、そこで『土田はあり得ないな』とか言われちゃった」

何も無い風に装った声はいつもより少しだけ高い音で、普段より少し震えている。

全然何も無い風に言えなかったことに、杏子自身気付いたけど。もう、どうしようもない。出してしまった声も、聞いてしまったことも。

「それでも、好きなんでしょ？」

「……うん」

形のよい小さな頭が、こくと動いた。

それを見て風音は、溜息を吐きそうになってしまう。

（あーもうっ、こんなに可愛いのにっ。あり得ないなんて言うバ

カは誰よ？）

しかし何とかこらえて、杏子の両肩にボンと両手を置き、伏し目がちに問うた。

「どこが『あり得ない』って言われたの？」

「『俺よりでかいのに胸が真っ平ら』とか『前髪パツンって勘違い女だろ』とか……」

「……そう。それでも、そいつのこと好きなの？」

「う、うん。そう、かな……」

世間では、その感情を嫉妬と言うのだろう。杏子の語ることはもどかしい怒りを感じながらも、杏子の気持ちには従順になってしまふ。我が身をどう振ったらいいかわからない。

だから彼女は、思いきって行動してしまふ。

（杏子には、ちょっと哀相だけど）

内心引かかるものがありながらも、心は決まった。

「そっか。なら、言っても大丈夫だね」

「何を？」

「私、杏子が好き。杏子がそいつを好きなように、恋愛って意味で」  
 「……ふえ？」

「女の子同士なんて、おかしいよね。でも好きだから。って、バイト遅れるよ。時間ないから、先に帰るね。あ、誰が好きか教えなさいよ？ じゃ、またねーっ」

一気に言い切った彼女は、そのまま淀むことなく腕を大きく振り、駆けていった。

杏子が見たとき、しっぽの跳ねる後ろ姿はすでに、小さくなりつつあった。

風音の心配通り、土曜日曜と杏子の頭の中を占めたのは、風音の告白だった。

いくら風音がアルバイトで忙しいとは言え、電話するとか、メールするとか、話のしようはいくらでもあったのだけれども。

（なんて言ったらいいんだろう……。私に好きな人がいるの確認してからって、なんで……？）

どうしよう？ どうして？

彼女が答えない出ようのない疑問に苛まれていると、ついには翌週の朝となってしまうのである。

「おはよう」

杏子はおっかなびっくり教室に入ったが、見慣れた光景しかなかったことに安堵する。

（そうだよね、いつもチャイムギリギリなもの）

ふう、と安心したように息をつき、机に鞆を置く。そして彼女はいつも通り必要な教科書を引き出しに移し、ゆっくりと椅子を引き、座るあたりで気付いた。

（風音が来るまで、どうしよ……）

安堵から一転、今まで以上に落ち着かず、高まる緊張との付き合い方もわからず、ただひたすら、机の木目を眺める。

すると程なくして、彼女の気持ちなど全く知らないかのような明るい声が、後ろの扉から届いた。

「おはよー」

入り口から順繰りに「おはよう」と挨拶を交換しながら、窓際の方へとやってくる。

杏子はまるで見てはならぬとでも言わんばかりに、硬く、机の木目を見つめ続ける。しかしやはりお構いなしに、彼女は声をかけてきた。

「おはよ、杏子。っと、いきなりごめんだけど、宿題見せてくれない？」

頼み事をされては振り返らぬわけにもいかない。それに、どうやって話したものかと思っていた杏子にとって、話題ごと提供されたのはありがたい限りでもある。

よくよく考えれば三日に二日は宿題を見せてと言われるのだから、心配するほどでもなかったのかと少し平静を取り戻しつつ、杏子は件のノートを手に振り向いた。

「どう？ これ」

後ろには、にこっと可愛く小首を傾げる風音。

「ど、どうしたのっ？」

——キーンコンカーンコン……

それを見た風音の素っ頓狂な声は、幸か不幸か、始業のチャイムにかき消された。

「失恋しちゃったんだよねー。私のこと狙ってる男の子諸君、今がチャンスだよー」

ポニーテールにしても腰まで届こうかという長さの髪が、土日を挟んで、項や耳まで露出するベリーショートに一変。

「思いきったねー。私なんか大して長くないのに切れないよお」

一時間目が終わると同時に、そんな心境を理解する女子生徒たちが、風音の周りに集まっていた。

男の子諸君も遠巻きながら話題にしているのが、事の大きさと

風音の立場を物語っている。

そして、すぐ前に座る杏子は、そんな状況に週末からの悩みを膨らませるばかりだった。

『失恋』ってやっぱり……。どうしよう……』

しかし意外にもいつも通り、意外にもこのタイミングで、聞き慣れた声が彼女を呼んだ。

「みんなちょっとごめん。ねえ、杏子、ちょっと来て」

人垣をかき分けひよこひよこと動く彼女の頭上に、もうしっぽは見あたらない。

（はぁ……）

自分にも真意のわからぬ溜息を心中でつきながら、杏子は俯きがちのまま立ち上がった。

視線を廊下の方に移すと、カラッと晴れた笑顔が見えた。

休み時間で賑わう廊下の窓際、風音の隣に杏子も立つと。お互いに視線を虚空に向けたまま、「秘密だよ」とでも言わんとする声色で、風音が切り出した。

「失恋なんて嘘だから気にしないで。私、全然諦めてないし。あ、それはそれで困る、かな？」

彼女はべろっとわざとらしく舌を出し、隣の杏子を仰ぎ見る。視界の端でその姿を捉えながら、杏子は反応を確定できず。だ

から。

「でも……」

言い淀み、逡巡するしかない。

勝手知ったる反応に、風音は安心して次の言葉を放った。

「そんなに責任を感じたいのなら言っちゃお。髪切ったの、杏子

のせいだよ」

「……」

本来は落ち込むべき言葉かも知れないが、今の杏子には心地よく響いた。罪を犯した後ろめたさから、解き放たれたかのように。

杏子がそう感じることを、風音はわかっていたのだろうか。彼女は改めて杏子に微笑む。

「何となく伸ばしてただけどき。私も、私らしく言うか、私のことは私で決めるって言うか、情性じゃない髪型にしたくなっただけ」

そう言いながら、彼女は背後にあったガラス戸を開け放つ。

「やっぱり寒いわぁ。昨日寝るときもなんか寒くってさ。しばらくは慣れないかもねー」

流れ込む冷たい風が彼女の短くなった髪を揺らしている。

「ショートって、本当に可愛い女の子じゃないと似合わないって言うじゃない？ なら、勝負してやる！ ってね。これで杏子を落とすつもりだから、覚悟しといて」

もう風で揺れる髪を押さえることもなく、彼女は杏子を真っ直ぐに見る。

「ごめん、私、どうしたらいいかわからない」

一方の杏子は風音と目を合わせきれないまま、わかる限りの気持ちを言葉にする。

彼女自身は気付いているのだろうか。今の彼女は、土曜日の俯いた彼女よりも、辛そうに見えることに。

風音はそのことに気付いていた。だから、彼女は、決めていた通りに。

「明日、買い物行こうよ。せっかく髪型変えたし、可愛い服着て

見せたいじゃない？」

ね？ と同意を促す風音に、杏子は自分でもよくわからず、とりあえず頷いた。

## §

「どう、かな？」

「んー、可愛さが足りない。もっとリボンとかフリルとか——」

「いや、それ、姉さんだから」

翌日の放課後、杏子と風音は約束通り、洋服を品定め中。

いや、正確に言えば。

「やっぱり、こんな短いスカート無理だよお。だいたい、風音の服を買いに来たんじゃないの？」

風音が自身の服を選ぶ予定だったのが、今、試着室にいるのは杏子だった。風音はなぜか、自らは試着室の外で、杏子の講評をしている。

そして、もう一つ予定外。

「そ、そうなんですか？ 俺は姉さんに杏子さんの服を選ぶの手伝ってと言われて……」

姉の隣で杏子を見つめる弟、颯太<sup>そうた</sup>の存在だ。彼にとっても予定外、聞いていた話と違う状況らしい。

言うまでもなく謀った風音は、半ば楽しんでる風に最もらしい理由を並べている。

「当然、杏子の服を買いに来たのよ。正直に言ったら、杏子は断りかねないでしょ？」

「そうかも知れないけど……」

「そんなんじゃない。実る恋も実らない。わざわざ男の子代表として、颯太まで呼んだのだよ。同士杏子よ、覚悟を決めようじゃないか」

「はあ……」

杏子との恋を諦めていないと言い放った風音が、杏子と風音じゃない誰かが結ばれる手伝いをしている。

杏子はこの妙な状況に、落ち着きの悪さを感じていた。しかし今、彼女を困らせている主因は、もっとわかりやすい。

「こんな服着ないとダメなくらいなら、諦めたいよ……」

彼女にここまで言わしめるほど、試着中の洋服が苦手のようだ。

しかし強い拒否反応は、風音を一層盛り上げていた。

（少しは嫌がると思ったけど、まさかここまでとは……。でもこれ、すっごく可愛いなあ）

いくつかの喜びを混ぜ、勢いを増した彼女は、もちろん彼女の意見など一蹴。

「あのねえ、肌色が全く見えない服で男が喜ぶとも思ってるの？ ロングスカートにタイツなんて露出ゼロじゃない」

「そ、そうだけどさ……」

「颯太、あんたも言ってやりなさいよ。見せてなんぼだって」

「姉さんも見せてないけどね……」

「あらあら、この子ったらなんてことを。じゃあ杏子にも、私と同じ服着せる？」

試着室の前で風音が、モデルのようにくるりと回る。

未だスカートを手で押さえる杏子とは対照的に、誇らしげに服を披露する彼女。しかし残念ながら、反応はひどく悪かった。

「姉さんの服は、近寄りがたいから……」

「おっきなリボンとか、あちこちにあるフリルとか、ちょっと……」

「何言ってるの、特にこのリボンがあ、って、違う違う。私のはこの通り、男受けしない悪い見本。だから、ほら、改めて言ってみなさい」

若干不本意な表情を残しながらも、彼女は弟に水を向ける。

二人の力関係では、どうしても姉には逆らえないのだろうか。気が進まない様子ながら、仕方ないなという顔で口を開く。それでも彼は、本音を述べた。

「杏子さんはいつものままで、いつもの洋服で、全然綺麗って言いか……」

どことなく落ち着きなく、お届け先から微妙に視線を外して、褒め言葉を贈る。

「そ、そうかな、ありがとう……」

杏子の方も同様に、さっきまでとは違う恥ずかしさを帯びる。

頬は淡い赤で彩られ、目を泳がせながらも素直に答えていた。

端から見れば初々しく微笑ましい光景ではあったろうが、もちろん、このような状況など断じて受け入れられぬものが一名。

「あんたたちねえ、恋人ごっこしろなんて言っていないでしょうが」

風音の一喝で二人の顔から火を噴く様は、彼女にとつてますます望ましくない。

目的を達するためと、意を決してキリッと頷き、まずは颯太に言った。

「颯太、彼女がミニスカート着てきたとき、すごいテンション高かったよね？」

「うっ、あれは……」

一名撃墜。

風音は続いて、目玉だけをぬうつと動かし、次の照準を合わせた。

「杏子、『野暮ったい』って言われたままでいいの？」

「それは、嫌だけど……」

もう一名撃墜。

作戦終了。

風音は満足げに、どこからか持ってきていたオーバーニーソックスを杏子に渡した。

「そのタイツほどじゃないけど、多少暖かくなるよ。じゃ、このまま外行くから、店員さん呼んでこよつと……」

「えっ？ そんな、やだ、着替えるよ」

「なあに言ってるのよ。いつチャンスが巡ってくるからわからないんだから、今から気合い入れなきゃ」

迷いなく店員を呼びに行った風音を見ながら、颯太はポツリと。

「俺、いなくてもよかつたんじゃ……」

「そんなことないよ。ありがとうね、颯太くん」

「えっ、あ、いやっ、どういたしましてっ」

独り言のつもりだった小さな呟きも、ちゃんと聞いている。

こんな杏子がなぜ可愛くないという判定を受けるのか、姉だけでなく、弟にも理解できなかった。

三者三様に歩む帰途。日が暮れて冷え切った外気が、今の彼女たちにはちょうどよかった。

「いい買い物したわあ。でも、その長いコートじゃねえ。せつかくの『絶対領域』が……」

依然嬉々としている風音。対して杏子は、まだまだ落ち着かないようだ。

見えるわけもないスカートの裾を気にして、手を前に後ろに動かしている。

「これ、落ち着かないよう……」

「そーゆー仕草は変な視線を寄せ付けるよ？ 颯太なんか釘付けじゃない」

「な、何言ってるんだよ」

少し後ろを、荷物を持たされ歩いていた颯太に、今度は杏子が視線を向けた。

雑踏の中、三人はふと立ち止まる。

「……やっぱり、男の子は、見たい……の？」

「えっ？ いや、えっと、なんて言うか……」

わざとらしく視線を外し、再び顔を赤らめる二人。

煌びやかな街の歩道で、少ししい雰囲気。

なんて状況に、なろうわけもない。もう一人いるのだから。

「はいはい、あんたたち通行の邪魔。アホなことやってないでとつとと行くよー」

その態度はいつもの風音らしくもあり、多少の計算もありだった。

(弟だからなあ、似ちゃうのも仕方ないか)

大きく広がったコートの裾も気にせず、彼女は自嘲気味の笑みを、向かい風に捨てた。

追ってくる杏子と颯太を振り返らなかったのは、彼女の意思なのだろう。

「待ってよー」

それでも後ろから聞こえる声を気にしてしまいがら歩いていると、意外な人物が目飛び込んできた。

(あれ？ 牧村じゃない？)

たくさんの人が行き交う往来の中だが、程なくして向こうも気付いたらしい。

「あつ」と目が合うと、にやりとした杏子が動くまでもなく、いそいそと近づいてきた。

「よお、桜野」

「何してるの？ こんなところで」

「俺は家がこっちなんだよ。お前こそ何やってんの？」

「買利物。と言っても、杏子のだけど」

風音はそう言って首を捻り、後方の二人を示した。

視界に入ってきたのは、そう急いだ風でもなく、楽しげに歩く男女二人。

(あーあ、これはあんまりおもしろくないかも)

彼女は苦笑したような顔を再び前に戻すと、ふと思いつき、気分は大転換。

(ふふっ、そうでもないか)

目の前には、風音越しの光景に驚く、彼の顔。

その表情は解せないところがあいながらも、風音を後押しするに十分なものだった。

彼女はにやついた顔を取り戻して、思いつきを切り出す。

「あんた、今、暇だよね？」

「まあ、帰り道だし」

「よろしい。ちょっと付き合ってくれない？」

わざとらしい上目遣いで牧村を誘うことに成功すると、彼女は

振り向き、ちょうど追いついてきた二人に言った。

「今日は付き合わせちゃったから、ケーキでも奢ったげる。さ、行こ」

返事を聞くまでもなく歩き出す風音に、付いていく一人と二人。

それぞれに顔を見合せて、それぞれに驚く様は、風音が想像している通りだった。

「いらっしやいませ」

「四人、空いてますか？」

「はい。こちらにどうぞ——」

彼女たちはウエイトレスのあとについて、店内の奥へと進んだ。

通されたテーブル席に座る前に、それぞれコート脱ぐ。が、一人だけは何やら突っ立ったまま。

（さてさて、脱いだらどんな反応かしらあ？）

風音はにやにやと、杏子と牧村とを交互に検める。

しかしその姿があまりに露骨なのだろう、風音の方が注目的になっている。

「ちょ、ちょっと、何よ？ とつとと脱ぎなさいよ」

泡を食った勢いで心中を口にした彼女には、ジト目が待っていた。

「姉さん、言ってることおかしいから……」

「考えてること見え見えだし……」

颯太と杏子にはあっさりを見破られ、牧村には不思議に見られと、散々な状況である。

（なんでよー、せっかく可愛い杏子を見せてあげようと思ったのに——）

稀有なチャンスをものにできないことに彼女は不満げ。しかし、肝心の視線を自分に向けてしまった失態を反省しながら、いつの間にかコートを脱ぎ座っていた杏子の隣に収まった。

「じゃ、あたしモンブランと紅茶ねー。颯太はミルフィーユ」

「……なんで姉さんが俺のケーキを決めるわけ？」

「そっちも食べてみたいから」

「はあ、わかったよ。それと紅茶で……」

窓際に向かい合って座る姉弟の仲睦まじい、と言うには語弊があるものの、仲が悪くはないらしいやりとりを他の二人は見ているた。

「こいつら、キョウダイなの？」

「えっ？ あ、うん、そうだよ。颯太くんは一つ違いの弟さん」

「ああ、それは知ってる。長距離やってるだろ？」

牧村の投げたその質問を拾ったのは、杏子ではなく風音だった。弟と言いついながら、しっかり聞いていたようだ。

「びんぽーん、って、なんで知ってるんの？」

「俺もやってるから。……早めに言っとくけど、桜野の方が全然速い」

「へえ、そーなんだ。ま、颯太は私の弟だからねー。牧村程度に負けてもらっちゃ困るね」

「ね、姉さんっ」

誇らしげに弟を自慢する風音に、颯太は居心地が悪そうだ。

能力はどうあれ先輩を重んじるという運動部の文化を、姉が理解するわけもないとわかってはいるが。

（少しは空気読んでよ……）

そんな願いは捨てられない。けれどもやっぱり、諦めるしかない

かった。

当人はさっぱり気にせず、話を続けている。

「いいじゃない、白黒ハッキリしてるんだから」

「ああ、気にするな。お前の方が速いんだから。けど、同じ名字の別人かと思ってたよ」

どうやら、颯太と風音と杏子と、三人を見て驚いたのはそれ故らしかった。

風音もそれを察すると、なんだかちょっと残念になりつつも、運ばれてきたケーキを引き寄せ、早速スプーンを手にしている。

「そう？ んまあ、似てないけどさ」

「いや……、大会のときさ、お前が桜野にキスとかしてっから、彼氏なんだろうとばかり」

彼の誤解に、颯太と杏子は「やっぱり」そして「またか」と不憫な表情。それでも何とか引きつった笑みに変えて、余計なことはいやうまいと紅茶に口を付けている。

「普通じゃない？ 姉は普通、弟を可愛がるもんよ？」

「普通じゃない。うちも姉がいるけど、あれはない……」

「そーいや、春菜ちゃんも、颯太のモトカノね、そんなこと言ってたなあ」

「……お前、大変なんだな」

牧村は颯太に向き直り、がんばれと言わんばかりに肩を叩いている。

すっかり颯太可哀相派に入ったようだ。

「あ、そうそう、春菜ちゃんがね——」

不利な勢力図も気にせず話題を提供する風音と、実はみんな顔を知っていたという状況のおかげで、四人の会話は案外盛り上が

った。

みなこのティーカップが空になり、ポケットから取り出した姉弟の携帯電話がお揃いの機種であることが話題となった頃、風音が席を立った。

「ごめん、ちょっとお手洗い。あー、はいはい、杏子も立ってー、ついでだから一緒に行こうか」

「えっ？ あ、うん。私も失礼するね」

背中を押される風音と杏子が立つと、華やかだったテーブルは半分欠けて、男二人が残った。その表情は、わずかに、暗く感じられる。

一方、洗面所では。一人が妙ににやにやしている状況に、もう一人が溜息をつきそうな具合だった。

「こんなことしなくていいのに……」

「まあいいじゃない。そうそうある機会でもないし？」

洗面台に後ろ手を付き悪巧み顔なのは言うまでもなく風音。

彼女は悪い笑みを深めながら、左手で持っている携帯電話を操作しながら言う。

「男の子にも体裁ってものがあるからねえ」

「……？」

風音は意味ありげに杏子に話しかけているが、杏子の方はその意味が全くわからない。

彼女が小首を傾げると、風音は視線を携帯から外して、仕方ないという風に話を続けた。

「周りが『あり得ない』とか言ってる子を、『可愛い』とは言にくいでしょう？」

「あ……」

「ま、そーゆーことよ。ってことで、颯太に電話してっと」

風音は発話ボタンを押すと、ボタンと携帯を折りたたんだ。洗面台に置かれた携帯から電話特有のノイズとともに、先ほどまで目の前にあった声が聞こえてきた。

『桜野のお姉さんは可愛くていいな』

『そんないいもんじゃないですよ?』

「とまあ、こんな感じで。話の内容は気に食わないけど」

単純な話、二人の会話を盗聴しようという魂胆らしい。

こともなく風音の狙いに気付いた杏子は、あまり気が進まない様子だ。

「やめようよ、こんなこと。なんか悪いよ」

「どっちにしろ、あとで颯太から聞くことになるよ?」

「そうだけど……」

理屈で言えば、風音の言う通り、大したことではないのかも知れない。とは言え、こっそり盗み聞きするなど、どうにもよくない気がした。

しかし抵抗していた杏子も、颯太の次の一言に聞き耳を立ててしまった。

『俺は杏子さんの方が可愛いと思いますけど。優しいですし』

仕組まれたシナリオ。

そんなことは聞かずとも、風音の顔を見ずとも、杏子にはわかっていた。それでも興味を止められない自分に、今はただ流されることを選んだ。

(さてと、私は失恋の覚悟でもするか)

携帯を食い入るようにつめる杏子を見て、自覚できる程度に、風音の表情には切なさが滲む。

扉の向こう、さっきまでいたテーブルでの会話は、二人の気持ちなどお構いなしに進んでいる。

『ああいうの好きなの? 俺はダメだわ——』

「っ——」

そう、二人の気持ちも、反応も、お構いなしに。

予想だになかった展開に、風音は携帯を取り上げ。

「ごめん、杏子。帰ろう……」

「うん……」

お互いは目を合わせることもなく、洗面所を出た。

テーブルに戻ると、颯太は風音と同じ表情をしていた。そのことを確認して、風音は二人分のコートと鞆を引っ掴み、一言発した。

「ごめん、急用できちゃったから。颯太、会計しといて」

「あ、うん……」

せわしなく出ていく風音と、それに付いていく杏子。尋常でないことは牧村の目にも明らかだったが、まさか、自分が原因だとは思わなだろうか。

「なんか、あったのか?」

「さ、さあ……」

装いきれない平静の裏側で、姉弟揃って、誤ることしかできなかった。

(ごめんなさい、杏子さん……)

何ら変わらぬ冷たい外気、強い北風に、二人はコートを着ていないことに気付いた。

「——」

風音から杏子へと無言で手渡されたコート。そのお返しは、細い声。

「これ、着てもいいの？」

「あっ、ごめん」

「ふふっ、遅いよーだ」

杏子が袖を通したそれは、大きなリボンで飾られた、らしくないコート。

「行こっ」

「あっ、待ってっ」

後を追おうと風音が着たコートは長すぎて、袖も丈も、たくさん余った。だから、もう一度脱いで、彼女はバタバタと走り出した。

## §

「着てた服、颯太くんが持ってるから」

杏子はそう言って、風音の部屋で待っている。

いたたまれず部屋を出ていった、お茶の準備に時間をかけすぎている風音を、待っている。

「お待たせ……」

「待ったよ」

「ごめん……」

ティーセットをテーブルに置き、くたっと座った彼女。

杏子がいつもの笑顔でいることに、風音は気付いていないだろう。

「ううん。ありがとうね、風音」

「えっ？——」

明るい声とともに放たれた違和感のある言葉に、風音は見上げると。

「あ、勝手にベッドに座っちゃって、ごめんね」

「えっ、あ、うん、全然いいよ。そうじゃなくて……」

杏子の言った「ありがとう」の意味がわからない。

風音の戸惑いは杏子も察したが、気にせず笑顔で続けた。

「本当のことがわかってよかったよ。おかげで、髪切らなくて済みそう」

彼女は真っ直ぐに切りそろえられた前髪を、ちょんちょんと突っついている。眼鏡の向こうにある瞳は、本当に嬉しそうに見える。

「この髪型、気に入ってるから。似合わないかも知れないけど、私が可愛くできるのなんて、これだけだから」

（杏子は何もかも、全部可愛いのに……）

風音は杏子の言葉にすぐさま反応したが、口にすることはできない気がして、ためらった。けれども杏子は、彼女が心の中で言葉を綴るだけの時間待ってから、続けた。

「おかげで、失恋”って程でもないかな。私から嫌いになったんだもん」

「男の子って、みんなあんなのかな。小さくて可愛くて、胸のある子じゃないとダメなのかな」

「私は好きな人の外見なんて、どうでもいいのにね」

風音も言いたかった。私もそう思うって。でも言えない。だから風音を見ていた杏子は、踏み出そうと決めた。

「風音は今も、私が好き？」

「……うん。今言うのはずるいかも知れないけど、ずっと、好き

だから」

「本当に？」

「本当だよ」

風音は逸らしていた視線を、杏子に向けた。

この前は少し俯いていた視線と、重なった。

「こうやって確認してからなんて、ずるいと思うけど。秘密にしていたことがあるの」

「秘密……？」

杏子の秘密。

興味があると言うより、違和感がある。どうしてだろう。風音は自分自身の気持ちに落ち着かないまま、杏子の声を聞く。

「あのととき、牧村くんは、風音のことが好きだって言ってた。

……私、嫌な子だよね」

「私にも、秘密、あるよ。さっき、杏子が辛かったとき、……少し、喜んだ」

「いいよ。私のこと、想ってくれてるんだもの。私のは、自分に都合よく——」

「そんなことない。杏子がいつも、私や、他の人のこと考えてるって知ってる。杏子は嫌な子なんかじゃない。杏子は可愛いもん。何が秘密でも、杏子が好き」

自分の気持ちを言葉にして、風音は落ち着かない理由がわかった。杏子が、私に、誰かに謝るようなことを、したことなんてないんだから。風音はずっと、そんな杏子の隣にいた。

「好きって言われるの、ちょっと恥ずかしいよね……」

きっと杏子には自覚もないのだろう。それは見えないから、気付かない人も多いのだろう。

でも、それは風音にとって都合良かった。そう思ったことを、いつか言える日のためにそっと秘めて。

「私は女だけど。男じゃないから、杏子を失恋させたりしない」

「……失恋じゃないって、言ってるのに」

再びの告白。

杏子は困ったような笑顔で、眼鏡を外した。

## あとがき

肩が痛いよー。Fukaponです。  
眼鏡時空から一ヶ月ぶりです。って、両方でお会いしている人はいるのかしら。

これを書いているのは三月一五日、姫カット前最後の休日です。イベントはだいたい日曜日にあるので、最悪土曜日に追い込めるのですが、今回は連休初日の金曜日。どうすんのよ？ と思いつつ、何とか。これからたくさん書き直しがあに違いないわけですが、何とか。何とか、間に合う、はず……。

姫カットには去年も参加しました。あのときは完全に話のネタで、出した本も宗教ネタと完全におバカな乗りでした。参加サークル教から言っても、これ一度きりだろうしなー、普段できないことやっこー、みたいな。

しかあし、なんと「もっともっとー姫カット!!2」のお知らせ。そして参加申し込み。わずかに二サークル、つまり隣は……。今年の話のネタとかゆー乗りではないけないと心を入れ替えて、文字の人らしく、ちゃんと(?)小説書いてみました。納期の都合で短いのは、許して……。

とは言え、姫カットをビジュアルなしでどうにかしろっつーのはなかなか難題ですよ。どうしようかと悩みましたよ。悩んだ結果がこれですよ。んー、どお？ なんか「お前、ホントに姫カッ

ト好きなのか？」と言われてしまいそうな気がします、これだけは言える。ああ、好きだ。

姫カット可愛いよねとか考えてばかりいたら、捻りのない単純な恋愛ものになっちゃったのは反省。

ところでこの作品、私にしては珍しく姉ものです。誤解なきように申しておきますが、私は姉も大好きです。ただもっと、妹が好きだけなんです。とゆわけで、春菜は風音に、妹のように可愛がられたりします。設定を固めるためにこのあとの展開ともちょこっと考えていたりするんですが、それによると、春菜も呼んで三人でお泊まり予定。ああ、妹と一緒に泊まりしたい。

そんな寝ぼけたことを言い出したところで、あとがきはおしまいです。

ではみなさま、次は五月のコミティアでお会いしましょう。

二〇〇八年三月 姉が好きなのは姉になりたいからかも知れない私より夢を込めて

# 私たちのヒメごと

Fukapon

2009年3月20日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか  
印刷／製本 project KAIGO東川口分室

Copyright © 2009 Fukapon <[fukapon@projectkaigo.org](mailto:fukapon@projectkaigo.org)>  
<http://www.projectkaigo.org/>